私の好きなことば（113）

茨城県市町村教育長協議会　会長
笠間市教育委員会　教育長
今泉　寛

霧の中を行けば　覚えざるに衣しめる

曹洞宗開祖道元禅師が説いた言葉や問答などを筆記した「正法眼蔵随聞記」の中の一文です。霧の中を歩いているうちに、いつの間にか衣は水気を含んで、気が付くと湿っていた、という様子を表していますが、その意味するところは「人は知らず知らずのうちに置かれている環境の影響を受ける」ということです。

このことは、学校にも当てはまります。学校のもつ雰囲気が知らず知らずのうちに子どもたちを育てているのです。学校のもつ雰囲気は、長い時間をかけて醸成されてきたものであり、学校文化とも呼ばれています。

令和二年五月、新型コロナウイルス感染症による学校の臨時休業が続き、子どもたちの心身の健康や学習の遅れが心配されています。その中で、学校の持つ価値が改めて問われているように感じます。

今後、ウイルスとの共存・共生の中で、社会構造が大きく変わる可能性があり、それに伴って、学校の在り方も変わっていくかも知れません。しかし、オンラインでは代替できない学校文化を失ってはならないと思います。

子どもたちが、毎日、学校の空気を吸いに行くことの意味は、学校文化を少しずつ体に染み込ませることでもあり、それが子どもたちの未来を生き抜く力の源になると信じています。

渡辺両師頌徳碑

八千代町菅谷３－７（医王寺）

八千代町役場から北へ700ｍ，八千代菅谷郵便局の北側に医王寺があります。その境内にひときわ大きな石碑「渡辺両師頌徳碑」があります。医王寺の本堂北側にあった私塾「三計学舎」を創設した住職の渡辺宥海と子の智海の頌徳碑です。

三計学舎は明治32年（1899）の頃に創設されました。授業は午前９時から午後４時までで，午前中のみの塾生も大勢いたといわれています。塾生は100名ほどで，八千代町出身が多かったといいます。教育内容は旧制中学校程度の国語や書道，時節に応じた挨拶の仕方など実際の生活に役立つものでした。指導期間は11月から３月までの５か月間でしたが，11月から通学できる塾生は少なく，12月から１月に通い始める塾生が多かったといいます。

初代師匠の宥海は嘉永２年（1849），下妻に生まれ，10歳で剃髪し，15歳から奈良の長谷寺で５年間修行しました。その後，明治10年（1877），27歳で茨城師範学校を卒業し，住職のかたわら地域の子弟教育にあたっていました。校舎は木造の２階建て。４月から10月までの授業が休みの時期には２階を養蚕室に使用し，後に上級者向けの自習室になったといいます。宥海は昭和10年（1935）10月に88歳で逝去しますが，その後，子の智海，孫の宥岳と引き継がれました。三代にわたる63年間，約2,000人余りの塾生が学び，町長，教育長，町会議員などを輩出した三計学舎は昭和37年（1962）に閉塾しました。この頌徳碑は，近代から現代にかけて，農村でも地域住民の教育に携わり，慕われた先生がいたことを物語るものでしょう。

茨城教育　第八六三号
令和二年六月二十日発行
編集責任者　樋口浩史
発行人　樋口浩史
発行所　一般社団法人　茨城県教育会
水戸市見和一―三五六―二
電話　〇二九―二二一―二七四七
印刷所　有限会社山田軽印刷所